

私の戦争体験

第二集



いずみ

発行所
大阪いずみ市民生活協同組合
堺市中安井町3-112 (第百生命ビル)
TEL 0722(23)4533(代表)
発行責任者 川島利雄
編集 機関紙委員会

1980年8月

特集号

幼い日の暗く悲しい 思い出



中村 吟子
(松原支部)

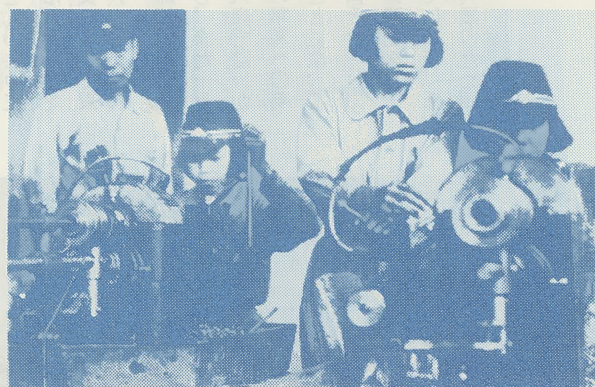
ぐるぐるっと想いをめぐらせて……脳裡を走馬燈の様に三十五年も前の出来事をよみがえらせながら。

昭和十九年七月十八日は、当時激戦地といわれた南方のマリアナ諸島で、父は戦死したことになっている。父の命日である。今、私も弟も妹も、父の命よりも長く生きていくことになる。幼い日、父の出征の為に別れなければならなかった。多くの若い人々が、次々と出征という名のもとに戦地へかりたてられて行った頃、父は出征兵士としては若くはなかった。三人の子供を残して後髪をひかれる思いであつたらう。母と私たちは、母方の里、岡山県の片田舎へ引越した。母は当時、祖母が居たので旅館の手伝いをしながら、農作業も手伝い、しばらく同居していたが、同い年くらいの従兄弟がいて、子供同士のけんかもあるし、母は辛い想いであつたらう。一年もいて、伯母の借家に移り、母は針仕事をしながら、私たちを育ててくれた。

当時の回想で、母の話してくれた事ですが、私が夕飯の仕度をするので、毎日、雑炊か、だんご汁しか出来ないのに、必ず「今日は何をやるの」と聞いたそうで、「よく毎日毎日食べたね」と。空襲には一度もあわなかったけれど、姫路の空襲で、父の伯母が亡くなりました。ラジオのニュースを聞いて、前夜、東の空が真っ赤に染っていたのを覚えているが、翌日母がかけつけた時には、一面の焼野原で、そこかしこ焼夷弾のからがごろろしていたそうである。

十九年の三月十日、当時の陸軍記念日、父からの急な知らせで、(中支から帰って来た) 広島の子供へ親子四人で、まだ暗いうちに起きだして、ぶるぶると身ぶるいするほどの寒い日だったと覚えている。鈍行を何度も乗りつぎ、たどり着いたが、寒い寒いところで、屋間は会えず、夜になって、やっと旅館で会えたけれど、火鉢も、おこたもなく、一食一台のお米を持参しても屋敷がして貰えなかった。一晚共にしただけで、母は子供たちの食事の無いことを案じて、私達は父と別れて帰った。雪のちらつく広島空を、陸軍記念日だからであろう飛行機が飛来するのを見た。この時が父との最後の別れとなった。

当時、隣組で山の開墾地を切り開き、サツマイモを作り、手に豆の出来たことも度々、田植や稲刈り、株おこしや麦刈りもした。田の草取りや畦の草刈り、そして茶の実とり、どんぐり拾いに、彼岸花の球根も掘りに行き、校庭に皆で集めたものが山の様になって居た。寒中には、一里もある山奥へ、ちびた運動靴をはいて冷たい土を踏み、足は濡れて氷の



女生徒も軍需工場へ動員された

様に冷えて、お腹をこわしても、休む事も出来ません。お粥の様な御飯を弁当箱に入れて持って行き、かいりて腹を暖めながら、雑木林の枝を切り、束にして一人一人が背負い学校へ運んだのは、一日ではなく、一週間も続いたのである。

戦後、貨幣価値が大きく変わり、貯金が封鎖され、生活は一層苦しくなり、母は自分の着物を農家へ持って行っては、食糧に替えていた様である。田舎では、父と同じくらいの人には大方居られた様と思う。何の保障もない時期が、子供の成長盛りであつたから、母の苦労は一通りではなかった。朝眼覚めると必ず起きているし、夜中、お手洗いに起きると、

黒い布で覆った電灯の下で、縫い物をしていた。いつ寝ていたのだろう、と思う程に骨身を削って働いていた。長女である私は、父の想い出は一番多く、いろいろと覚えていたが、妹は何も知らず顔も全々覚えていない。弟も殆んど記憶がないであらう。私の息子たち、娘も成人し社会人になって、今後各々の人生を歩む事であらう。でも息子を絶対戦争には行かせたくない!

戦後三十五年たった今も、原爆被災者はいる。決して戦争は終っていない。私は一生、幼い日の暗い悲しい想い出を忘れはしないであらう。

私の原爆体験



K・N
(向ヶ丘支部)

私が広島で原爆を体験したのは小学二年の時でした。私は爆心地より三・七kmの幼稚園に居たので、あまり悲惨な体験はありませんでしたが、町の方が火事の様に夜もずっと燃えていた事だけは記憶があります。私には、姉二人と兄(六歳年上)の四人兄妹でしたが、兄はその日学徒動員(当時中学二年生)で現

在の広島市役所の近くに行っていたらしいです。これから書くことは母から聞いた話です。

母は夜まで待っていて兄が家に帰ってこないで、翌日より姉をつれて広島市内に捜しに行きました。近所の人から、〇〇で見たと聞けば、水筒と薬と食物を持って焼跡を歩き廻ったそうです。皆んな母達を見ると「私は〇〇に住んでいる〇〇です。もし家族に会ったらここに居るからと知らせて下さい」「水を下さい。母を、家族を捜して下さい。私は〇〇です」「おばさん僕の家族を知りませんか、〇〇に住んでいるのですが」「……母は地獄絵を見るようであつたといひます。母は地元の人のことを聞くと知らせてあげたりしたらしいですが、自分の息子の事が心配でほとんど空返事だったそうです。とに角、広島駅からは全部焼けてしまった場所の見当がつかなくなった。収容されている場所で息子の名前を捜し、あちらこちらと七日、八日と歩き廻ったそうです。

九日の昼頃帰って来て「学校で聞いてきた。以島に行っているのだからすぐ行く」と姉二人をつれて行きました。島に船が着くと棧橋に沢山の人が迎えに出ていて、自分の肉親が来るのを待っていたらしく、母はすぐ兄を見つけた。看護婦さんが「この人達、今夜がほとんど時なのです……」兄は、上半身に着が焼けたらしく、やけどで三角布を巻いているだけ、下は女の子のはくフルマードで、顔はまん丸くふくれ、背中にはもうウジ虫がはつていて、人相が変わっていたのですが、姉二人と看病したらしいのです。夜中

にウワ言を云つたり、何か云って急に起き上つたり、起き上ると痛がるので三人でそっと寝かせたり、一晩で三・四回そんなことがあつて、十日の朝五時半頃に死にました。共同の場所焼けてもらったそうです。

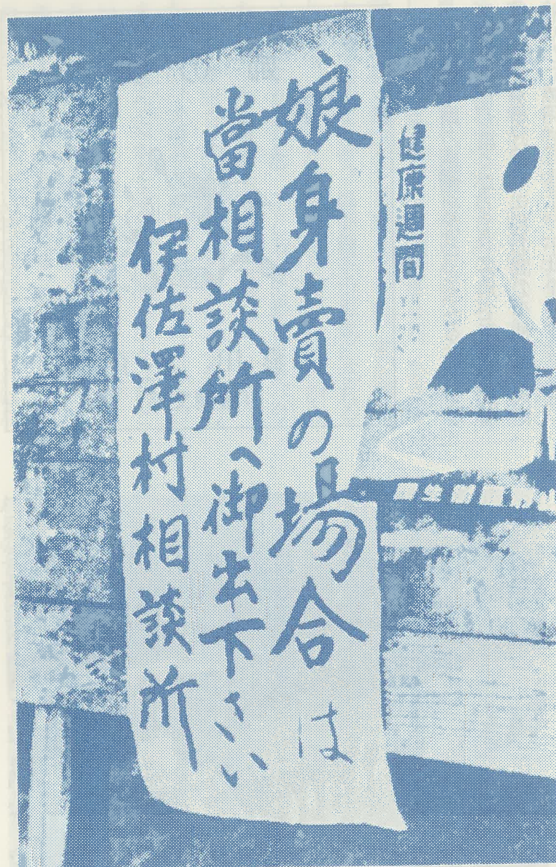
私が子供の時、朝は慰霊祭に行き、昼から舟でいつも以島に行くのが毎年の行事でした。母が以島の慰霊塔での供養が無くなるまで欠かさずお参りしていたのが分かったのは、二・三年前、兄のお骨を市からいただいた時です。

現在は八月六日の朝の慰霊祭ですが、お祭りの様で心からお参りしている人が少ない様に感じられ、家族を失った人の悲しみは何年たつても変わらず、あんなものではありません。

私が六年生の時、砂場の整地を皆でしていると、学校で死者を焼いたらしく(学校が病院、バケツに数杯の骨を拾い集めたのが、今から想えばせつない思い出です。

私が六日の朝見た様子は(近所に医者があつたので)幼稚園からの帰り道、胸をはだけて血だらけでハダシで走って来た女の人、頭から血がポトポト、戸板に乗せられて来た人、手から血……等々数時間見て家に帰ると、家の中は砂ボコリだらけ。夜は竹やぶへ避難。私は子供だったので、ただ毎日が異なる事連続で、兄が死んだのも数日わからなかった。お盆になってやっと分った様子です。

私がこの様に書いても書き足りない位の私の体験を書いたのは、現在喜寿を迎え元氣にがんばっている母の為に、二度と肉親の死亡を味あわせたくないため。戦争はもう人



庶民の人生は、徹底的に軽視され、犠牲にされた

事故、病気などで心配をさせないようにする
のも一種の親孝行だと思っている私です。
(以島は広島の子品港より船で二十分位。
現在は海水浴場です)

戦争とは「飢え」の 毎日でした



羽 淵 安 司
(羽曳野支部)

私にとって戦争とは何だったのか。戦争時
子供だった私が中年になっても 戦争中のこ
とは鮮かに想い出すことが出来ます。

私は当時、某中学校の二年生でした。もと
も勉強好きで無く、敵機来襲の警戒警報の
サイレンで授業は中止になり、喜び勇んで学
校を飛び出し、国電の環状線の寺田町駅から
大阪駅行に同方向に帰る同級生ら五人と共
に、乗車しました。既に、前回の空襲で焼け
野原となっていた校の宮駅で同方向の友人と
下車し、残りの三人は大阪駅に向いましたが、
その直後近くに爆弾が落ち出し、慌てて焼け
跡の防空壕に飛び込みました。

後でわかったのですが、同級生の一人は学
校を出るのがおくれ、私達の一台後の電車に

乗ったのですが、その大阪駅行の国電環状線
の電車は、京橋駅で空襲に会い停車してしま
い、乗客は駅下の防空壕に誘導され、避難の
害が京橋駅に直撃爆弾が落ち、駅が二つに分
断され、その友とは再び会うことができなか
ったのです。電車一台の差で生死が別れまし
た。

今振り返ってみると、私にとって戦争と
は、一言でいうならば「飢え」の毎日でした。
今の若い人達に、食べものが無くなったのだ
といっても想像すら出来ないといわれ、我々
が体験した苦痛が伝わらない空しさを感じま
す。白米を腹一杯食べられた時の嬉しさは、
体験した人でないといわれないのは当然でし
ょう。

又、戦争中は私にとって、明日の生命の保
障の無い、明日に希望の持てない恐怖の連続
でした。戦争のもたらした混乱と、焼野原に
なった三十五年前の大阪を想い出す時、平和
な時代が続いたから現在の繁栄があるのだ
と、平和のありがたさを痛感します。子供心
に一番嬉しかったのは、終戦の翌晩灯火管制
のとけた明るい街、あかあかと灯った街の夜
景でした。あの当時子供を持つ親、大人達は
我々以上に困惑したことは想像しても余りあ
るものがあります。ベトナム難民のニュース
を見ても、気の毒だとは思いますが、我等の
世代も似たような体験があるため戦争の宿命
だ、戦争を起した当然の報いだと思っていま
います。

イザヤ・ベンダサンが「日本人は水と平和
は、タダだと思っている」と警告しています
が、二度と戦争を起してはならない。「ベトナ

した。私たちは十三にいる母方の伯父の家に
行きました。はぐれていた父、姉、兄とも伯
父の家で再会でき、お互いの無事を喜び合いま
した。母は伯父につれられてすぐ医者に行き、
大事にならずにすみました。

二、三日してから難波へ戻りました。家は
跡形もなく、あたり一面焼野原です。亡くな
られた方もたくさんおられるようだと言いま
した。長年飼っていた猫の「ミコ」はどこでい
うふうふうして死んだのかなあと、今でも
ふと思ひ出します。

十三で家を借り、何とか生活ができるよう
になったのもつかの間、六月七日の空襲で又、
私たちは焼け出されました。

△難民のキャンプを見よ「あの姿が戦争の
報いだ」と声を大にして叫ぶ次第です。

大阪大空襲の思い出



寺本 久美子
(泉南支部)

昭和二十年三月十三日の夜ふけ、その日も
又、空襲警報のサイレンでおこされ、ねむい
目をこすりながら防空壕に避難しました。当
時は連日のように空襲があり、ねまきに着が
えて寝るという生活ではなく、服を着たまま
モンペをはいて寝ていました。電灯も黒い布
か紙でおおって、光が外に出ないようにして
いました。食べ物も、衣類も配給で不自由な
生活でした。

その日の空襲警報はなかなか解除になら
ず、どれぐらい時間がたったのでしょうか、
街のあちこちに焼夷弾が落とされ、火の
手が上ってきました。しかし日頃、町内会で
訓練していた消火訓練などものの役にもちま
せん。たちまち大火事になり、私たちは逃
げるようになりました。私は救急袋だけを大
事に持って家を出ました。

私たちは当時難波に住んでいましたので、

女学校二年生だった私は、警戒警報で学校
を出て、地下鉄で梅田まで来ました。ところ
が、阪急電車がストップしています。仕方な
く引き返し、天王寺の友達の家に行きました。
学校を出てからずいぶん時間がたっています。
トイレへ行きたいのですが、どこにトイレが
あるのかわかりません。悲憤な思いで友達の
家のトイレにかけこんだ時のことは今でも忘
れられません。

いつまでも友達の家にいるわけにもいかず
夕方家に帰りました。阪急電車は止まったま
まです。梅田から歩いて十三大橋を渡りまし
た。そこは又、一面の焼野原でした。淀川の
堤防には大勢の人々が避難していました。両
親はどこにいるのかわかりません。あたりは
暗くなってきました。小学校へ避難した人もい
ると聞き、なれない暗い道を知らない人と一
緒に小学校へ行きました。そこで無事な両親
に会いほっとしました。私のことをずいぶん
心配したそうです。

二度も家を焼け出された両親は、大阪で家
を持つことをあきらめました。愛知県刈谷で
働いていた二人の兄の所へ母と私が行くこと
になり、父と姉は仕事の都合で大阪に残り、
寮生活をするようになりました。小学生の弟
は学童集団疎開で滋賀県にいました。
こうして私たちは長年住みなれた大阪を後
にして二日ばかりで刈谷に着いたのです。

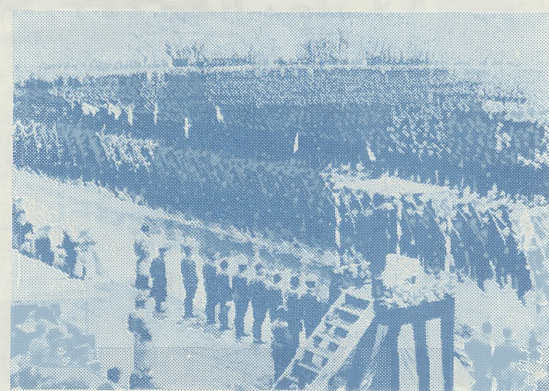
姉の死



喜田 光子
(金剛支部)

私の幼年期の記憶をたどってみると、不思議に敗戦色が濃くなって、各地で空襲や食糧難の洗礼を受けた一年程の間の事柄が、実に鮮やかに甦ってきます。子供達に何回も話したからでしょうか。いいえ、子供心に、こんな苦しい事はない、こんな生活は長く続けられないという何か切羽詰った気持があったようです。

昭和二十年、私は国民学校三年生で、和歌山市和歌浦に住んでいました。二年生まで通っていた学校は、市電通学だったので警戒警報が発令されると、集団で掛足で家へ帰らなくてはなりません。途中万一ということもあるので、家の近くの学校への転校を余儀無くされました。紀伊水道を北上するのが、B29のおきまりのコースで、登校すれば警報で家へ帰るといふ有様、勉強などいつしたのか、記憶にもありません。家へ帰って警報が解除されても、学校へ行かずに、遊んでいたのですから、今の子供には嘘のような話です。



学徒動員。このうち何人が父母の元へ戻れたらうか

でも夜の空襲には悩まされました。その頃には、各家で避難用に防空壕を掘っていました。私の家では、十軒程離れたところに掘っていました。寝ついたと思ったら警戒警報で防空壕行きです。父母は半分眠っている子供達を急がせて連れていくのです。それぞれ、枕元に非常用の袋と頭巾を揃えていて、それを持って行くのですが、私などよく寝ぼけてしまつて、防空壕へついてみると、大事に抱えていたのは枕であつたりしました。防空壕の中は、大変な湿度で、持ち込んだ布団はじとじと、ナメクジと同居といった有様です。中の異様な臭いが何時までも鼻について離れず、長い間私の記憶の中にちゃんと位置を占めていました。

私の長姉は大阪の清水谷女学校を仮卒業

(卒業式もなく、学徒動員の為、半年程早く卒業しました)して、工場に動員されましたが、胸を患って、昭和二十年の春頃から、和歌山の自宅へ帰っていました。薬もなく、ただ病魔に犯されていくのをじっと見守るしかなかった父母の心中を思うと、今でも胸が張り裂けそうになります。

六月頃、夜、空襲になつても、姉は防空壕まで行く元氣もなく、父と二人で家に残って布団を並べて寝ていました。私達は、防空壕の中で、父と姉が残っている家に爆弾が落ちないように、一生懸命祈り、警報が解除されて家に帰って二人の安全を見届けて、ホッとしました。そして姉は日に日に弱っていききました。「お姉ちゃんが死んだら、私が大事にしているもの皆あげるよ」といったのは死ぬ一週間程前でしたでしょうか。

私には、死がどう言うものかおぼろげにわかつていました。丁度一カ月前、真昼に、全く突然、機銃掃射のバリバリというものすごい音がして、防空壕へ行く間もなく、布団を頭からかぶって、私はもうここで死ぬかも知れないという、何とも言えぬ恐しい体験をしました。

姉の死は静かにやってきました。私のいない間に。八月十五日の終戦後、一カ月もたない九月六日に。母が階段の下で、じっと坐りこんで泣いていた光景を忘れることができません。姉は戦争のために死にました。でも彼女にも青春の喜び、楽しさがあつたのです。姉の残した日記には、苦しい日々の中にも、甘い、せつない想いが綴られていました。

金平糖と防空頭巾



松本 千鶴子
(東大阪支部)

ピンクや緑、黄、白と楽しい色がいっぱいの砂糖でつくられた金平糖は今も市販されています。でも三十九歳の私には、金平糖はひもじかった戦争の頃の思い出とつながるのです。空襲警報がなると防空頭巾をかぶせられて夜中であらうとたたきおこされ、堺市百舌鳥の親類の家へ避難しなければなりません。逃げた途中、焼夷弾が落ちて、恐ろしい眠気が吹っ飛ぶことも度々でした。家が福助本社の近くなので、爆弾投下の対象にされるからと、警報のなる度にはとどの家がからっぽになりました。子ども心に恐さより、ひもじかった記憶がありと残っています。

よくさがさないと米粒がどこにあるかわからない、大根や人参がいっぱい入っているませごはん、ぬかをまるめた団子、なんば粉といわれる、とうもろこしの粉で作った食物など、とても貧しい食生活でした。その上パンや菓子にはクーポン券を持っていた、買う時にお金と一緒に渡して品物を受取らなければなら

らないという物不足の時代でした。たまに買った金平糖がうれしくて、玄関を出たり入ったりしている内に、敷居につまずいてころんだ私はおでこを植木鉢にぶつけて、けがしてしまいました。医者にも行かずに自宅治療で治しましたが、二センチ程の傷跡が残っています。

私の友人に、父親の顔さえ知らずに育った人がいます。罪のない人々がわけもなく大量に殺される戦争を私は心から憎みます。権力と金力のある一にきりの人々が榮えて、多くの人々が犠牲を強いられ、自由を奪われていきます。夫や息子たちに銃をとらせたくはありません。

関経連の日向会長の徴兵制発言や、戦犯たちが国会の議席を占める現状を憂えずにはいられません。堺駅の近くに龍神川という川がありました。この川には死体が果々と積み重なっていました。爆弾に焼かれた人が熱いから、きつと水を求めて川へ飛びこんだのでしょうか。

死というものの意味さえよくわからない私の手をひいて、父は私にこの死体を見せる為に、龍神川へ連れていきました。死体からたのぼる黄色い煙と、肉のやけるような匂いが、私の記憶から消えることはありません。「よお見ときや、これが戦争いふもんやで」。それ以上、父は何も言いませんでした。

幼い娘に難しい話をしても理解できないと思った父の何よりの教えだったのでしょう。戦争の危険が感じられる先頃の世の中の気配は、戦火をくぐったものには敏感に感じられるのです。

大根の葉っぱ



土屋 由紀子
(狭山支部)

愛する夫を失いたくはありませんし、かわいい子供達を父なし子にしたくはありません。戦争に反対することが生命がけの仕事であつたとしても、私は生命をかけて反対しようと思いません。

「天皇陛下、万歳。」などと言って死んでいく、そんな青年に息子たちを育てないやうに、そんな世の中になんかしようとするのが生命を生みだした母親の義務だと思っています。

金の星社から出版されている「かわいそうなぞう」という本を、二歳になる息子に読んでかかせていますが、小さいながらも理解できているのか、真剣にきいています。

戦争を体験したものが、次の世代の人たちに戦争のこわさ、みにくさを語り伝えていかなければならないと思います。再び日本が武器をもって戦争をしないように……。

いつの配達日だったでしょうか、共同購入で手に入らない野菜類を、近くの農家から分

けてもらっている私達の班に、大根が届きました。それは、まだ水分を含んだ土と、青々とした葉っぱのついた、みずみずしい大根でした。

若い組合員さんが「大根の葉っぱは、ヒタ菜というそうね」とおっしゃった時、私は、ふと戦後間もない頃の、ある日のことを思い出しました。それは私にとっては、つらく悲しい思い出でした。

初冬の頃だったと思います。小学校入学前の私は、一番仲良しのサッチャンと、どんぐり拾いに行きました。

私達疎開者にとっては、耕作する土地もなく、食糧事情は極度に悪かったのです。母が



とにかく食べなければならなかった

作ってくれるおやつやのむしパンには、「どんぐりの粉」が入っていました。ですから私にとってどんぐり拾いは、お手伝いだったのですが、農家の子だったサッチャンにとっては、単なる遊びにすぎませんでした。

「サッチャン、私ね、一生懸命どんぐり拾ってるけど、ほんとうはがいから大嫌いなよ」

「エッ、どんぐりなんか食べてるの？」

どんぐりを拾いながら、つぎつぎと食べ物の話しははじまりました。タンポポ、さつまいもの葉、そして大根の葉っぱなど、私の家族が食べている物を聞いて、サッチャンは、ほんとうにびっくりしたようです。

「大根の葉っぱなんか、うちではにわとり

の餌にしているのよ」

私はサッチャンのことを聞いてたまたまくなり、どんぐりの袋を手にも山道を駆けおりました。とめどもなく涙が頬をつたっていました。自分自身が傷ついたよりも、母に対して申し訳ない気持ちでいっぱいでした。

私達家族が、お米や麦を食べるために、いや、大根の葉っぱを食べるために母の苦労は大変なものでした。当時、母の大切な着物が食糧に変わっていったのです。母と祖母が、タンスの前に座って、何か相談している日は、必ず母の着物が一枚一枚減っていたのです。着物を抱えて行く母、今日はいくつ村をこえて行ったのでしょうか。

日暮れになって、思わしい交換ができずに、持っていたつみ子を抱えて帰ってくる、そんな母を見るのは、子ども心にもとてもつらく悲しいものでした。

当時、父は神戸の川崎重工に勤めており、父は父なりに給料をもらっていたと思います。でも、お金で買えるのは配給の品だけであり、祖母、母、兄弟四人の食糧は、とうていそれだけでは足りなかったのです。そんなわけで大切な母の着物が、物々交換の対価になっていたのです。

母は、三人の子どもの末娘として大切に育てられた人でした。着物は、そんな母と祖母との、また母と父との思い出多い品々にちがいはなかったのです。

毎年のことですが、梅雨があげると私は着物の虫干しをします。風とおしの良い部屋で、一枚一枚丹念に、たたんでいきます。結婚前

に、父母や姉が見立てて作ってくれた着物、夫に買ってもらった着物、そんな思い出のある着物のなかですすむと時を、私は大事にしています。

このなかに母から貰った丸帯があります。母は、あの戦後の苦しい生活のなかでも、祖母のもの、父のもの、そして母のものとしては、結婚の時に身につけた花嫁衣裳だけは、手放しませんでした。丸帯は、そのひとつなのです。

結婚衣裳は、物々交換の対価として大変値打のあるものだったでしょうが、母にとっては父への愛情の証であり、末娘として祖父母への感謝の気持ちであり、和服をこよなく大事にした母の、心のよりどころであったのでしょう。

私にはひとりの娘がいます。

まだ小学校四年生のこの娘が、いとおしくてなりません。私自身が、大切にしているものは、すべて、その時々に応じて娘に譲りたいと思っています。母もまた、私と同じ気持ちであったにちがひありません。でも、母にはそれができませんでした。戦争は、母のこの思いを引き裂きました。私は、娘への愛を引き裂かれたくありません。それどころか一層強いものにして、さらに、娘と孫たちに引きついでいきたいのです。平和はそのために絶対に必要な条件だと思います。

戦争が、人間によっておこされるのなら、平和もまた、人間によってつくられるはずなんです。ただ、戦争は、荒々しい破壊を目的とした岩石のようなものですが、平和は、いつも

終戦前後の満州で



金井 静子
(三国支部)

昭和二〇年八月七日に日ソ不可侵条約を一方的に破棄してソ連が参戦しました。

私達は旧満洲国奉天市（現東北地方瀋陽）に住んでおりましたが、奉天も戦場になる可能性があるという事で奉天と大連の間にある大石橋という小都市へ疎開させられ、そこで八月十五日の終戦をむかえました。

昭和十六年十二月八日に太平洋戦争突入のニュースを聞いた時は本当に驚きましたが、

大切に守りつづければ保てない「美しい腫」のようなものと思えます。それだけに、平和を保ち育てる私たちの努力は、多くの人達とともに、粘り強くなされなければならぬでしょう。

「大根の葉っぱ」は、私に、子孫に遺す最大の財産である「平和」をつくりつづける誓いを、新たにしてくれました。これからの日々、平和をつくる一員として、精一杯の努力をしたいと思っています。

満洲ではまだ日本のように緊迫した状況も最初のうちはありませんでした。が、そのうちに奉天の空にもB29の機影が見えるようになり、警戒警報や空襲警報が不気味に響き渡り、郊外の中嶋飛行機製作所に爆弾が落ちて黒煙が何時間も立昇っているのが見えたり、ある時は隣組の当番で監視哨に立ちB29の行方を見つめている時小さな戦闘機が十数機飛び立ちB29に体当たりするのを見ました。蘭花特攻隊の若い生命が天空の果てに散っていったのです。

また奉天駅を狙って外れた爆弾でしょうか、浪速通りという三十間道路がありました。が、その満蒙百貨店の前に落ち榴鉢状の大きな穴が出来て、丁度冬だったので地下何メートルかまで凍っている凍土が飛び、たたみ二畳位の百貨店の向いの薬屋の屋根にのっているのを見ました。またその時に、爆風で腹を裂かれた馬がガードの下に倒れていました。もう一発は繁華街の春日町の真中に不発弾として落ち、半分位地面に埋まって突き立っておりまして、一トン爆弾で、男の人の背丈よりも高かったように覚えてます。

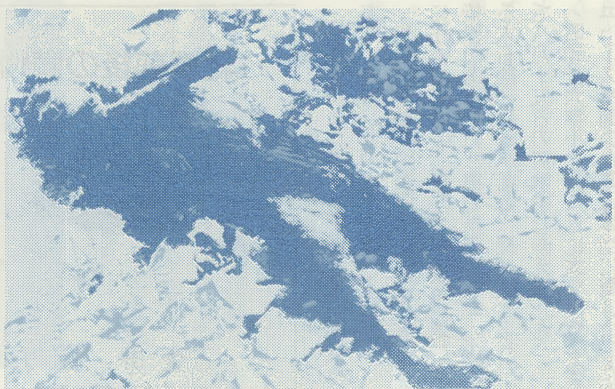
満洲に住んでいた人達の苦難が始まったのは終戦後からだっと思えます。街にはソ連の兵隊がウヨウヨおりましたし、終戦と同時に南の方から蒋介石の軍隊が入ってきました。関東軍は幹部連中がソ連参戦の情報が入ると同時に飛行機で家族もろとも逃げ出してしまつて混乱状態だったらしいし、日本、満洲の警察にはもう権力はありませんし、住民は居留民団をつくって自衛するしかありませんでした。

大都市では日本人も多いし隣近所との連絡もよくとりあって、私達の近くでは人命にかかわるような危険は少なかったのですが、小さな町などでは満人の掠奪にあつて奉天へ身のまわりのものだけを持って逃げてきた人達もありましたし、北満へ開拓団として入植した人達が文字通りの命がけで何十日も歩いて奉天に辿りつき、第一回の引揚げを目の前にしながら発疹チフスや栄養失調で倒れ、恨みをのんで死んでいった人達——奉天の青年学校の校庭に、戦時中は防空壕として使っていた、生徒が全部入れられる程のコの字型の壕に、五段にも六段にも折り重なって投げ入れられていた死体。奉天に辿りつくまでにも、体力が尽き果てて倒れて死んでいった老人や子供、病人があつたそうだし、赤ん坊が泣いて、泣声で居場所がわかると皆殺しにされるので口をおさえていたら窒息死をしていた、という話も聞きました。

病気をしても医者が召集されていない、薬も食糧も衣類も生産する人達が召集されているので僅かしか生産されない、出来た分は軍の方へ優先的に廻されるので一般人には手に入らないといった状態だったのです。

戦争とはほんとうに私達にとって何だったのでしょうか——。

「お国のために」の一言で、命を奪われても、生活を破壊されても、子供達はじめ、皆が飢えても何も言うことが出来なかった私達でした。戦後三十五年、戦争を知らない世代の方が多くなったといわれる今日このごろ、有事立法とか、徴兵制を考える時だとか、自衛隊の予算一兆円うわのせとか、きなくさい言



原爆は一瞬のうちに人を炭に変えた

葉がちらほらと聞かれるようになって来ました。

戦後は終わったとか遠くなったとか言われますが、引揚げの時赤ちゃんを殺してしまつた親や原爆症の人達など、心に、また身体に癒すことのできない傷を持った人々の戦後は死ぬまで終わらないのではないのでしょうか。

戦争によって得をするのは、ほんの一にぎりの人達だけで、我々庶民は苦しむだけだと言えらると思います。思い出すだけでも戦争は二度といやです。若者たちを戦場へ送らないために、戦争のために泣き、悲しむ者がないように、私たちは声を大きく戦争反対を叫びたいと思います。

百万人もの人達が殺されたことを、政治を知らされなかった、知らなかったではすまされない、戦後に続く戦争の大きな犠牲を……。

いまこそ平和の尊さを、

平穏な時には、平和や自由のありがたさは身を感じないものです。いまの日本は女性にも選挙権があり、国民が主役の社会なのです。あの悲惨な戦争を再び繰り返そうものなら子供達からこのように責められようとも許されるものではありません。

ところが、世界情勢は緊迫し、米国の軍備増強要求に呼応するように、財界の大御所は『兵器の調達は金次第』『兵器を持つ人集めを考へる段階だ』と公然と放言している今日、先般の国政選挙で、自民党に大き過ぎる権力を与え八〇年代の政権を委ねた国民の判断は正しかったのだろうか、疑問と恐怖の毎日です。民主主義とは表向き、まだまだ知らされていぬ裏の部分で、有事立法、一般消費税、小選挙区制、機密保護法、弁護士抜き裁判、健保法の改悪、教育勸励の礼賛と平和憲法の改悪まで画策され、この選挙結果で一挙に浮上して来るんではと、不安はつのるばかりです。

世界は常に動いています。選挙の時だけでなく、家族の栄養や健康を考えると同様に政治の動き、各政党の態度を常に読み、ウソを見破る真眼を養い、もの申せる間に機敏に対応し、教育の司法の政治の反動化と戦争を阻止し平和を守る力を、この社会の半分を構成する女性が、この社会の主役を堂々と果た

戦後に知った戦争の実態

貴田 南海子
(東大阪支部)

疎開先で終戦を迎えた私は三歳。空襲や戦時下の耐乏生活などは、肌で知らない。

父が再建した自慢のドラム缶風呂つきの畳のない大阪の家に戻った時から、私の戦争は始まった。町内の学校も焼失し、隣の小学校へ入学したものの、校舎が足りず一つの教室を二クラスで併用する二部授業という変則的な学校生活。何が定かな原因か、学校きらいの登校拒否に陥りました。今思うと、学舎だけの問題ではなく、教師や教育内容等々にも問題があり、混乱した世情と虚弱児の私の身体と心には負担が重く順応できなかったのではないのでしょうか。健康な者のみが生き残れるというような厳しい世の中で、病気の御問屋のような私が、こうして生きていくのが不思議です。耐乏生活の中で必死に育ててくれた両親のおかげと感謝のみの一念です。

「戦争しよう」と云うた人は、だれや？」

平和は人類みんなの願い

川西 節
(白鷺支部)

戦後生まれ育った私達には、戦争は話を聞いた写真を見る位で、実感がどうしても湧いてこない。「恐しい」という一言だけしかわからない。戦前の人は、大小はあれ、苦しい生活をして来ておられる。衣食住の満たされている今日では、それを計り知る事は困難である。でも、世界の各地では、内紛があちこちで起り、今もなお、飢餓で一日数百人の人々が亡くなっていると聞いて他人事ではない。何もかも輸入に頼っている我国では、一歩間違えば明日にでも飢餓時代が来る事になります。

私の父母も戦争の被害者である。中国の満州国の大連という所で生まれ育ち、二十五歳まで生活しました。祖父は、大連港など建築したり手広く仕事をしており、会社もたくさんあり、何不自由なく暮らしていました。戦争が勃発すると、家には内地で召集された部隊が、続々と大陸に上陸してきて宿泊をした。

映画「戦艦大和」



小林 武子
(向ヶ丘支部)

我が息子は高校一年生、唯今、期末テストの真っ只中、今夜も息子の部屋の明かりが消えていない。それにつけても思ひ出すことが一つある。あれは、私の高校三年生の時であ

た。制空権を奪われた島へ、風輸送で武器や食糧を細々と送っている実状に、無謀な戦いをしたのだと思った。
ジャンゲルの奥深く、今なお、残っている遺骨が訴えている声のない声。頑丈な歯の痕跡に、未来に無限の可能性を持った若者達であったろうと想像される。
観光地化された沖縄の表裏では、戦争を知らない若者達の幸せな姿がある。平和とは何とすばらしいものだろう。この人達やこれから生れてくる子供達を、再び、戦場に送ることがない様、戦争を知っている世代が、戦争の悲惨さを教えていかなければならない。三十五年たった今、決して風化させて了わない様、語り伝えていかなければならないと思う。

進学組の補習授業を受けている時代のことである。私の親友が「今日、補習授業をサボって映画に行こう」と云いだした。しかも、それが、数学である。解析Ⅱである。私は、啞然とした。だって彼女は、私と違ってクラスでも番号が上位の方である。それが、なぜなのである。「今日までで、映画が終わるのよ」「何という映画?」「ついて来るとわかるから」。私にしてみれば、解析Ⅱは、サボリたい学科である。即、返事をした。「いいわよ」。小さい町に当時、映画館が、二か所あったかと思う。上映されていたのは、忘れもしない「戦艦大和」であった。
七万二千トンの艦体に、四十六センチ巨砲を装備した軍艦「大和」は、その姉妹艦「武蔵」と共に、帝国海軍が栄誉と命運をゆだねた存在であった。大和の設備は複雑で、メカニクスは精密をきわめ、乗組員の修練は厳しく烈しかった。しかし、「大和」の生涯は、短かった。就役してから沈没するまで約三年五ヵ月にすぎない。最も純度の高い帝国海軍の姿であったろう。
映画は、二十五年前のことなので、鮮明な所は少ないが、忘れられない大きなショックがそこにあった。映画の途中、おそらく沈没する凄絶な死闘のシーンだったろう。彼女が大声で泣きだした。誰もが涙は流していただろうが彼女の慟哭は余りにも激しいので、周りの人々がこちらを向いて私も困った。慰めたが彼女は本気で怒りだした。「あなたにはこのつらさがわかっていない。私のこの戦争で父を失ったのよ」彼女は、だから一人娘であった。おばあちゃんとお母さんと彼女の女

ばかり三人家族であった。お母さんが農業をして彼女を育てた。山里の秋は厳しかった。彼女も田植え、稲刈り、労働をしながら、中学、高校、大学へ行く。しかし、彼女は才女だった。中学は首席で出た。高校もがんばった。その彼女が最も不得意としたのが解析Ⅱだったろう。私も例にたがわず、常に組の平均点を下げる役目をしていた。サボってまで見たかったその映画、私にも、だんだんわかってきた。くやしかったろう、なげなかつたろう、彼女の気持の一千万分の一程、わかったであろうか。
次の日、数学の先生には、叱られた。「こんな大切な時期に映画に行った者があつた。昨日行ったものは立て」長々と説教を聞いた。次に黒板に問題を書かれ、彼女と私はその問題を解かねばならぬはめになった。彼女は解いたが、私は途中でお手あげ、もう一度説教。余震の方がひどかった。しかし、その後、彼女と私はより深い親友となった。
それぞれ違った道に進学した。そして、彼女は今も一筋教職の道にあり、二児の母として強く生きている。私は結婚をして職を変えた。当世はやりの塾である。といつてもたいしたことはないが、多くの子供さんに接するのは彼女と同じだ。忘れてなるものか、この戦争の犠牲者を、一人でも多くの人々に平和のありがたいことを知らせないと。ユネスコ憲章の前文に
「戦争は人の心から起る。ゆえに平和の皆は人の心の上に築かれねばならぬ」とある様に、平和的な心とは、仏教でいう慈悲、キリスト教でいう愛をもって人々に対す

戦争に敗け、全財産は国の賠償金の肩代りとして没収された。無一文となって引揚げた父母が何一つない生活から始めた内地での生活は、苦しいものだったようです。私達にそういう生活をしてみると言われても、はたして一日でもできるであろうか。いや、できそうもない。
日中国交になり、大連にも自由に旅行できる機会もあるでしょう。柳川高校の修学旅行でも大連に行く世の中、テレビで見ながら、父母も戦後の大連駅、港を感慨深く見たことでしょう。宝田明さんも、自分の育ったハルピンの家で泣いておられたように、今は他人が住んでいる父母の家に足腰の立つ間に、一度でも行かせてあげたい。まだまだ自由には

まだ青年ばかりの人々で、間接的にお国の奉公という事で家中大歓待をした。兵隊さんとトランプをしたり、写真機に写し、彼等のふる里に送ってあげたり、一流の中華料理店に案内してごちそうしたりした。でも、出発の命令が下った時、サイン帳に住所などを書いていただいた手は震え、歯はカチカチと音をたてていたのを今も父母は思ひ出すようです。
その人達も、戦闘第一日目で戦死されたその後で聞いた時はショックだったそうです。出発までの数日間、楽しく過ごしたひとときも、一日明ければ戦争で死ななければならぬ。今生きていれば、六十三歳から七十歳の年齢に達している。でも母の胸の中には、あの青年達の姿がいつまでも生き続けている事でしょう。一枚の紙で尊い命が無残に滅びるとは、やりきれない思いである。

戦争の真実を語り継いでゆこう



山田 末子
(美原支部)

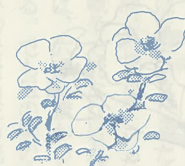
昭和十六年十二月八日、真珠湾奇襲のニュースと共に始まった太平洋戦争が、二十年八月、原爆投下を受けると云う悲劇の中に終結するなどは、まだ小学生だった私には、想像も出来なかった。軍国主義に塗られていくスパルタ教育の小学生時代「勝たねばならない」との思いで、物資の窮乏にも耐え、一生懸命頑張った。四年生の時、アッツ島玉砕のことを担任の先生が話され、一緒に泣いたものである。
その頃から悲壮な気持が湧き、特攻隊の飛行士の座ぶとんに入れるのに送るのだと、当時、お風呂屋さんにて感染して来たひどい結膜炎にかかっていた目から涙を流しつつ、山へスキの枯れた穂を採りに行ったことを思い出す。はたして、あの穂は役立ったろうか。

その時は、何かせずには居られなかったのである。小学六年生の終戦の日、一番先に頭をよぎったことは、「もうこれで、兵隊さん達は戦死されることもなく、日本も爆撃を受けなくてすむ」との安堵だった。敗戦にガククリと来るには、幼なすぎる年令だった。が、終戦直後からの原爆の惨状を伝える新聞写真には、心を痛めた。
やがて、学校を卒業し、社会人になった時、この悲惨な戦争について、もっと勉強したいと思い、書物をあさった。数多くの本を読んだ。「インパール作戦」「ガダルカナル作戦」を読み、兵士達が、戦う以前に、飢えと疫病に倒れていく姿の悲惨さにショックを受け



急速に増強される自衛隊という名の軍隊

軍拡競争に思う



湊 春代
(富田林支部)

ることではなからうか。私も子供達に、その様な心で接する様に努力しよう。高校時代のあの好ましからざる行為の一つが後の人生を大きく左右したといつては、おこがましく、オーバーだが、サボった解析IIの損失を悔いてない今日である。

暑い夏が巡り来て、三十五年目の終戦記念日が近づいて来ました。今私は平和に暮せる日々感謝しながら、三十五年前のあの悲惨な戦争当時を思い出しながら、風化しつつあるこの事実、体験者の一人として日頃感じるままに今年も又、ペンをとってみました。

原爆の爆発実験が成功したとき、オッペンハイマーは、物理学者たちは罪を知ってしまった。そしてそれはもう失うことのできない知識である、その威力のすごさにうたれ嘆息した。知ったものは必ずつくりだすにはいられないことを、物理学者としての経験から直感する。競争相手に対する恐怖が存在し続けるならば、現在すでに持っている知識からだ

けでも、そうとう長い期間にわたって、次々に新しい兵器をつくる余地は残っていると指摘している。今日のような防衛力を強化する風潮が根づきよくなかれば、国益や国の安全を守ることが常識ではなく、戦争はあつてはならないものだというのが、常識になる世界をつくる以外にないと、結んでいる。

(朝永振一郎著『物理学とは何だ?』より)

恐怖心が科学者たちをかりたてるのだろうか。戦争はあつてはならない常識、なんと簡単であつてなんとむづかしいことだろう。最近ではフランスで、人間だけを殺すのを目的とする、きれいな水爆などといわれる中性子爆弾が実験済みとのこと。もう人類絶滅の日もそんなに遠くはないかも……そんな錯覚すら感じてしまふのは私だけだろうか。すべての人々に生きる権利があるのに、それを根底から破壊する核兵器の開発や保有は断じて許されません。科学者たちがこつとも核兵器の発明・発見だけにエネルギーを傾けるものだったとしたら、未来は本望に絶望的と思か思えてならないのです。科学技術を、人間を殺すためのエネルギーにするのではなく、世界の人々が平和共存できるエネルギーに創りかえて欲しいと願うものです。

世界の各地でいやな出来ごとがひんぱんに起っている現状です。我国でも、軍拡とか徴兵制とか、戦後から戦前になりつつあるような物騒な話題をよく聞くこのごろです。又、どこかの戦争にまきこまれる、そんな歴史の逆流があつてはならないし、日本は平和憲法の不変の国であると思いたい。そして平和憲法

法を守り通さねはならないと思う。戦争を体験した人々が戦争は地獄なんだと徹底的に語り継がなければ、やがては忘れ去られてしまふのではないだろうか。ノーモア・ヒロシマの叫び声だけでは、確かに力にはならないかもしれない。けれど世界唯一の被爆国であることを忘れずに、平和の尊さを訴えて行くと共に、戦争を知らない世代に、原爆や空襲の悲惨さを語り継ぐことの大切さを思うのです。

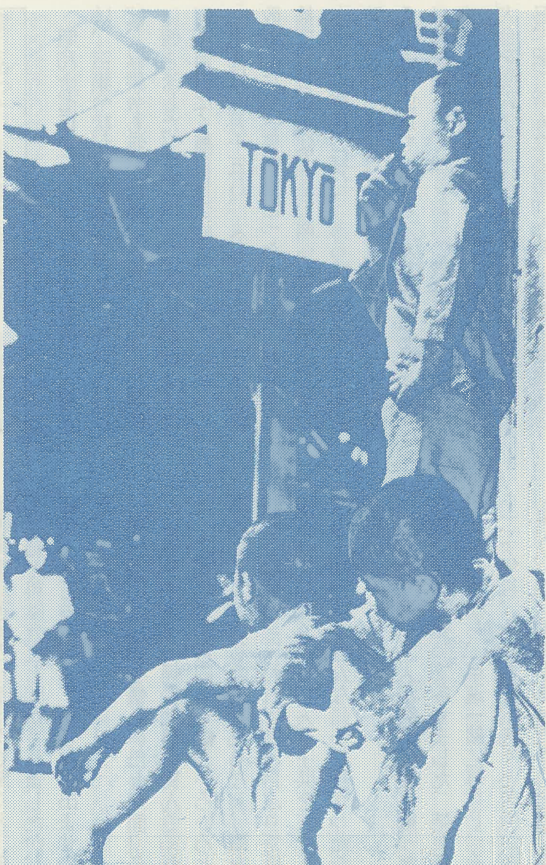
青春の譜



原田 貞子
(初芝支部)

いつの間にか私も四十八歳になっていた。昭和一桁は血が薄いと云われながらも、主人は今日も元気に仕事に出た。私と同じ年の六年生まれである。二人の子供は十九と十七歳。思えば途方もなく遠い旅を経て来たよう、ふと疲れが気になり出した昨今である。

幾度となく居を移し、幾度となく人生の目標も変え、知人も友人も都度あえなく去って行った。何処をどう歩いて来たのか、ふと堺に住む私が我ながら不思議に思える。物には原因と結果が当然あるが、私には結果だけ



戦争はこんな子供を無数に作った

がこんな型で残ってしまった。戦争とは、生き残った人間の魂までも完全に奪い去ってしまった。

今年もまた、同窓会の通知が来たけれど、私はかたくなに案内状を破り返す事を書こうとしない。嫌な嫌な思いだが、目まいを憶える程に私をさいなみ痛めつける。何が懐しい青春時代であつたらう。今更集めて懐しがる、そんな感傷はもう昔の日に何処かに忘れてきてしまった。だから、二百名も卒業したのに出席者は十人余りである。

いい主人と二人の子供に恵まれ、私は一生懸命に生きて来た。この文を書くまでは、子供の誕生から私の人生の始まりであつたと堅く信じて止まなかった。戦争が熾烈化した昭和十九年、私は待望の女学校に入学した。

年は十三歳、希望に胸をふくらませ、新しい生活を考えてとひとりだに笑って仕様がなかった。けれどもそれは私一人の喜びでしかなかった。世の中は、そんな乙女のささやかな喜びとは何の関係もなく、ますます戦争の泥沼へと突込んでいったのである。何も知らない、何も言えない私までも呑み込んで。

それは文字通り一夜の夢であつた。夕食をすまし、それぞれに部屋にもどつて私はその日の宿題をし、今日始めて友人になった隣りの席の子のために、詩の一篇などを写し、「お休みなさい」と書いて寝ていた頃であつた。父の叫び声で飛び起きると窓の外は一面真赤な焔が天をこがしていた。真暗な空を西から東へ整然と並んで爆撃機が何十機も通つて行く、バラバラと豆をまく様に落ちてくる焼夷

弾のあまりの数に、誰もが争つて家を飛び出した。どの家もどの家も大阪中の人らが父母を捨て兄弟を忘れて、四方八方へ逃げ廻つた。夜の明けたのは正午頃であつた。まだくすぶり続ける煙の中で、大阪の街はがれきの山となつていた。行く当てもなく、叔父のいる高石へ私達は足を向けた。何処でもいいから横になれるであろう方向へ、とほとほと宿なしの一軍の行進が始まつた。

せつせと母が粥を煮る。表面は全くの水ばかりで、時々沸騰に合せて米粒が舞い上がる。数えるばかりの米粒で、なんとか親子三人が夕食をすまそうというのである。おかずは大根の葉が殆ど煮物だけである。それでも今日はおかずが付くのである。私の誕生祝いである。

父は半官半民の会社の課長であつた。一寸偉らそぶつて何時も優しい父であつた。だのに折角のお祝いに「軍の招待でたらしく飯を食つて来た。つくりも出た。酒も出たぞ」と有頂天に喋りだした。私は涙が出て仕方がなかった。

自分ひとりがいよいよ物を食べて、全く私のお祝いを無視しうる父が憎くさへあつた。十日程して母の使いで隣町の知人の処へ用事に出た。街角に長い人の列があつた。ふと見ると父が列の程程にいて、前の方を背伸びして眺めているのである。「豆を煮すいや」と叫びながら、列の後方に人が走り寄つた。その夜、父が「軍の招待でつくりも出た」と大威張りで帰つて来た。闇買いもようせず、母子の腹を空かせた甲斐性なしの父も、晩年は部長にまで昇進したが、母はそれさえも知

らずに栄養不良で他界した。母が死んでも涙ひとつこぼさず、しらけた気持で、野辺の送りすませられる十六歳の乙女の何処に人の情がみられようか。わびしい私の青春の譜である。

外地で終戦を迎えて



野 長 寿 枝
(鶴山台支部)

昭和十七年、その当時は空襲警報や、男子は、召集令状が来た時代でした。外地へ行けば、召集令も無いと思い、縁があつて北朝鮮に嫁しました。その後、二十年の終戦までは何不自由なく暮らしました。

思えば八月十五日、よもやと思つてました敗戦になり、警察官だった主人と、何もかも捨て、日本人ばかりで南へ南へと集団で今のベトナム難民の様に、ある時は野宿、又ある時は民宿、持つて来た一枚の着物をお米にかえ、途中山道では赤ちゃんが死亡、又大人も栄養失調で亡くなりお気の毒でした。途中、三十八度線では決死の覚悟で闇の船に乗り、大金を使いました。元山に集結しましたある日、駅で皆さんと居った時、兵隊と間違えら

れ十人位連行その中の一人に入つてました。その時は心細く、一人になったと残念でした。でも幸せんことに子供が無かつたから、日本人世話人会の紹介で、朝鮮人の家庭に住みこみ、女中として一生懸命動きました。給料はありませんでした、いつか内地に帰れる日迄、寒さも凌げるし、でも親のこと、それから姉弟、内地ではこんな暮らしを、主人は殺されているか等、想われない日はなく、こんな所では死ねない歯を食いしはり一日千秋の思ひでした。

やがて翌五月夢にも見た日本に帰れる日が来しました。難波に着いた時、難波だったからでしょうが、女の人は綺麗な着物を着ており、私はモンペ、みじめに思い、でも無事で帰つたと自分で心を取直し、自分の家に帰り着けば焼野原。近くのバラックで聞くと、疎開して、姉と弟は死亡と聞かれましたが、長い間色々と苦労しますから涙が出ませんでした。

翌日、田舎に参り懐しい母と対面、色々と苦労話を生きて帰つた事を喜んでくれました。北朝鮮だから内地では、いろいろと噂があつたようで、私の顔を見るなり、頭を坊主にしてないねといわれ、九ヵ月ぶりで鏡の前に座りました。母も二人も子供を亡くし、私達も生死不明とどんなにか心細かつたことかと思ひます。

次に十一月、主人が突然、凄せ細つた栄養失調の身体で帰つて参りました。姉が商売をしてましたから、早速一緒に暮らし、それから二十年程、そちらで、色々苦労がありましたが、二人共命があつたからと喜び合ひ今

日に至っています。

三十五年ぶりで、この五月、成業警友会全国大会で箱根に出席し、お互に色々終戦当日の思い出や懐かしい話で、一日楽しく過しました。でも私達は外地引揚者の証明を紛失しましたから、その当時の国から頂くものも頂けず、損をしましたが、お陰様で、やっと今年になり復元して頂ける様になり有難く感謝しております。

でも主人と早く死別した母は、色々戦争の為苦労し、子供を二人も戦争犠牲にしましたが、長寿をしました。又姉は私にと、亡くなつた後も、着物を色々とのこしてくれましたが渡鮮後は一度も逢えず、弟もよく手紙をくれました。私にとっては戦争は、内地に住んで居った者には解らない心の傷跡です。

親友の死



山 田 勉
(鶴山台支部)

鼻血と、切れた唇から出る血で汚れた顔をおさえながら、木村が部屋に帰つて来たのは十一時すぎだった。九時の点呼と消灯のあと二時間にわたつてうけたリンチの凄惨さを、

血で汚れた顔が物語っていた。

私はぬれた手ぬぐいで木村の顔をふき、冷してやった。手ぬぐいはところどころ赤く染まり、木村はときどき「うっ」と息をつめて痛みをこらえ、私の手をつかんだ。しかし痛いとは一言も言わず、腫れ上がった顔につくり笑いを浮かべ「大丈夫や、寝てくれ」と言った。私は木村の言葉に従うはかばかかった。

点呼と消灯のあとは、無許可の会話と点灯は厳禁である。みづかれは、部屋の者全員寒い廊下に引き出され、朝まで不動の姿勢で立たされる事になる「すまんのう」痛さをこらえた神戸なまりの言葉を背に、床についた。

上級生に対して敬礼を怠つたというのがリンチの理由であった。私達は、通信士を養成する官立の学校の最下級生で、そのとき十四歳であった。全員寮に収容され、軍隊式の規律のもとで教育されたが、ときには自殺者も出るほどの、凄惨なリンチや苛酷な教育が行われた。誰もそれが普通だと思つ、狂った戦時下の世の中であつた。

手崩れという一種の神経緊張作用で、ツートンツートンという「シ」のモルース符号だけが、どうしても電鍵でたたけず、自殺したという生徒の部屋は空部屋になり、物置に使われていた。夜中にその前を通ると、ツートンツートンという声が聞こえるというので、便所に行くのがこわくて窓から放尿して見つかり、リンチを受けた生徒もあった。木村が道で出会った上級生に敬礼しなかつたというのは、言いがかりである。神戸三ノ宮生れの木村は、同じ制服を着ていても都会風なスマートさが身についていた。ズボンも

きらんと折目をつけ、靴もよく手入れされていた。きりっとした顔立ちで、色の白い美少年であつたから、一部教官や舎監から可愛がられもした。下級生のくせに身だしなみのよいのが生意気だというのが、本当の理由であつた。

リンチのあと木村は眼に見えて反抗的になり、わざと敬礼を怠つたりした。リンチを受けても物理的な抵抗こそしなかつたが、相手をにらみすぎる木村の眼の色に無気味な光が宿るようになった。

木村と同室であるというだけの理由で私もしばしばリンチを受け、その分だけ私と木村の仲は親密になり、上級生への反感がつのつていった。

上級生の卒業の日、私と木村は竹刀をもって寮の玄関口で、目星をつけていた奴の出て来るのを待ち伏せた。卒業した上級生はもはや私達にとって上級生ではなかつた。木村と私の前で、彼等は階級章をこられた将校のような無気味な存在であつた。おどおどして許しを乞ふ卑屈な元上級生に向つて私と木村は竹刀をふるつた。木村はそれだけでは満足せず、たおれた奴の顔をけり上げたり、ふみつけたりした。

私達の卒業式の日、木村とは「卒業記念日にはここで会おうな」といって大阪駅の地下のカメラ屋の前で別れた。木村はもうすっかり不良じみてはいたが、別れぎわにみせた笑顔の人なつっこさが、今も私の胸に残っている。

敗戦後一度だけ約束の場所であつた。特攻隊の飛行服に半長靴というスタイルで、ポケ

原爆がもたらした悲しみは今も



玉 浦 史 子
(美原支部)

十四歳の少年木村の写真は、五十一歳になつた今の私の眼からみると、幼くかわいいの時の姿のまま、アルバムに収まっている。

半年程たつて、木村のお母さんから、彼の死を知らされた。三ノ宮のヤミ市の縄張り争いの乱闘で、中国人に撃ち殺されたとの事であつた。しかし私には、木村を殺した本当の下手人はあの軍隊式教育にあつたとは思えない。

ツットに拳銃を入れた木村は、どこか凄さを身につけた青白い顔をしていたが、私に向ける笑顔には昔のままのなつかしい面影があつた。

昨年八月六日、原水禁大会に「いづみ市民生協」より参加した帰り、広島県下の某家に立寄つた時のことです。子供達にとって初めての、本物の戦争に接して興奮の連続でした。いとこ達と夜遅くまで広島の話をしていて、四歳の姪の口から

ふるさとの街焼かれ

身よりの骨つめし焼土に

今は白い花咲く

ああ 許すまじ原爆を

三たび許すまじ原爆を

我等の街に

と、思いがけない歌を聞きました。驚いて妹に「教えたの」と聞くと、夏が近づくと幼稚園に至るまでこの詩を口ずさみ、戦争の悲惨さを、罪もない多くの人々の死を悼むのだからです。

終戦の前の年に広島県東部に生まれ、戦災もつげず食糧にもさほど不自由せず大きく育ちましたが、幼な心に忘れえぬできごとが一つあります。被爆した叔父の死です。当時爆心地にほど近い所に住まいしていた伯母夫婦は、命からがら実家である私の家にたどり着きました。親子三人つねに白血病におびやかされ、特に叔父は原爆病院への入院を繰返すこと数回、ついに帰らぬ人となりました。



祈り。……だが死者は戻らない

真紅の夾竹桃が咲く頃になると、広島は活気を帯びてきます。静かに夫の冥福を祈る伯母の姿に本当の悲しさ、許すものかという怒りを感じずにはいられません。ありあまる物資の中で、戦争を知らない世代が多くなりつつある昨今。表面戦争のこわさ、おろかしさを忘れがちな日々、原水爆禁止大会の必要性を認めつつも、お祭りさわざとくたくな

背を向ける伯母の姿をみつめる私も複雑な気持ちです。

直立不動で「教育勅語」を聞きました



森田 かず子
(美原支部)

私は長野県の小さな山村に生まれ、小学校に入学した年の十二月八日に太平洋戦争が始まりました。いつも朝礼のはじまる前、北東の方向（東京の宮城のある方向）へ全員で一分間の黙とうを捧げ、校長先生のお話に入りました。又紀元節、天長節のような祝日の式がはじまると、校長先生がモーニング姿に真白い手袋をはめて桐の箱の中からうやうやしく取り出した「教育勅語」を重々しく読みあげるのを、生徒は直立不動の姿勢で頭を下げて聞いていました。

水を打ったような静かな会場で突然バタツと音がし、女の先生が静かに走り寄って、緊張のせいか貧血のためか倒れた生徒を運れて保健室の方へ消えて行きました。こんなことはいつものことで、みんな今日は誰が倒れたのかな位で気にもとめず、それよりも一刻も早くこの場から解放されたいとそんなこと

ばかり考えていたように思います。

いつの頃からか毎月八日には、近くの神社へ全校生徒が並んで参拝（たぶん必勝祈願）しました。いよいよ本土への空襲が始まってからは、一人二人と縁故疎開の人たちで教室がにぎやかになり、どんなはげしくなつてからは、東京から集団疎開の人達が私の家のすぐ横の農協の二階の大広間へ大勢やってきました。親と離れてどんなにつらかったか知れませんが、子供達の多くは劣等感の裏返しでしょうか、よそものとしていじわるする人もありました。教室も一時は八十名位にふくれがあり、身動きもできない位です。でも授業はほとんどできず、校庭に防空壕を掘ったり、出征兵士のいる家にあっちこち分かれて、草取りなど子供でもできる野良仕事の手伝いに行かれました。都会からきた子は、つらい毎日だったと思います。途中で気分が悪くなり、私が農協の近くだったので送って帰ったこともありました。

二十年に入ると、私達の村にも朝鮮から連れて来られた人達が、村はずれの荒地にさつまいもを作ったりしていましたが、夜になると労働のつらさか故郷恋しさにか逃げ出す人がいて、父たちは二人ずつ夜中の一時か二時頃交替で見廻に行っていました。冬の寒い時でしたので、私は子ども心にこんな寒い時に逃げだしても、どうせ山の中を逃げて行くしかないのだから、そう遠くまで行かないうちに捕まっつてひどい目にあわされるぐらいなら逃げずにいればよいのにと考えたものです。今考えると、日本人もずいぶん思いあがったひどいことを平気でしていたものだと思ひ

くなります。

その頃の私は、戦争のことなど何も知らず先生のおっしゃることを信じて、天皇陛下のため、日本国のため、国民が一つになつてこの戦争を勝たなければ。そのためには、どんな犠牲でもはらい出すと何を言われても従いました。食べるものも少なく、着るものもなく、その上金物類は全部供出させられて、よくみんな黙っていたものです。教育のこわさ・知らない・知らされないこわさをひしひしと感じます。今の日本も、私達の知らない間に軍備が拡張され、気のついた時はもうどうにもならなくなっていた、というようなことがないようしっかりと現実を見つめ、生きて行こうと思います。

年老いた父母に捧ぐ



坂本 允子
(新金岡支部)

「允子、起きなさい、話したいことがあるから」。戦況の厳しい昭和十九年の東京、蒸し暑い夏の夜でした。当時小学校三年だった私は、いつにない母の声に、うたた寝から起きれました。「夏休みになったら允子は山梨へ

行くのよ」「みんなぞ?」「ひとりで疎開するの、兄さんや姉さんはもう大きいから、この東京に残って、母さん達と一緒に、お国の為に働かなければならないんだよ。」母は更に、家も焼かれ、みんな死んだ時は、田舎の子になつて、祖母や叔母の云うことをよく聴いて、次の日本を背負う立派な国民にならなければいけない、と語り、これはお上のお云いつけなのだからと、付け加えました。久しぶりに田舎へ行ける嬉しさは一瞬にして消え、涙をポロポロこぼしながら、言葉を返すことも出来ず唯、こんな一大事を、涙一つ見せず淡々と語る母の顔を、不思議な想いで見つめました。父、兄、姉はその時何をしていたか記憶にありませんが、囲りが妙に静かだったこと、薄暗い居間に、さっさと向い合せた母と私の間に流れた、思つまる様な空気がだけ記憶に残っています。

私の息子、娘が小学校三、四年になった頃、この時の話を聴かせたのですが、当時の母の気持と、私自身の母性が重なり合つて、涙ぐみずには語れません。矢張り母にはかなわないと思う。私が母の立場におかれたとしても、あの様に凜とした態度は出来ないだろうと思つたものです。その夜から数日後、母は物資の無い中をどう工夫したのか、友達数人を招んで、送別会をしてくれました。久しぶりの御馳走に満腹し、みな歌を唱いました。父も調子はすれの唱歌を唱い、母は割バシ二本でヴァイオリンを弾く真似をしながら、天然の美を唱ってくれました。父の歌には、友達も私も、お腹をよじって笑いこけましたが、父母の心づくし

は私の胸にも熱く刻まれました。

山梨の母の実家は、甲府市から約四キロ、笛吹川にやや近い川田という村にあります。養蚕をして居ましたので、忙しい盛りで、私を送って来た母は、手伝いながら一週間程滞在して、私の新しい生活に馴染むのを見届け、東京に帰って行きました。私の顔を伺う母に、「平気よ、帰っても」と強がって居ましたが、いざその時が来ると、母を見送ることが出来ず、泣き顔を見せまいと終日、裏の納屋に隠れて居たことを覚えてます。

二十年六月、父が中耳炎を悪化させ、甲府市の県病院で手術を受けました。七月に入つて、甲府の空も米機の来襲が頻繁になり、医師の止めるのを押して父は退院、母の実家に近い叔母の家で養生することになりました。私は父にびったり着いて離れませんでした。その翌日が七月六日、忘れもしない七夕の宵祭り、甲府は大空襲を受けて全滅しました。

あまり防空訓練もしたことのない村の人達は、先を争って笛吹川の広い土手に向って逃げだしました。私も父や、叔母の指示で、ひとり浴衣姿に防空頭布をかぶって、隣家の人達について走りました。無我夢中で走りましたが、走る方の空に照明弾が一発、続いて炸裂する焼夷弾、思わず土手にはりつく様にかがみこんだ時、突然、私は死ぬかも知れないと思ひました。死ぬのならひとりで嫌だ、父さんと死のう、と思うとパツと起き上り側の人の止めるのをふり切り、走って来た方角に向って一目散に走り出しました。途中、幾人かに声をかけられましたが、抗らつて走り続け、叔母の家に飛び込んだ時、動けない父

と、父に付き添って連れていた叔母は驚いて、父は恐い顔で「どうして帰って来た」と声を荒げました。「だって父さんと一緒に死ぬ方が良いもん」と、こらえていた感情が堰を切つて泣きじゃくる私を抱いて父はもう何もいみませんでした。

安全と思つた疎開先でのこの経験が、何処に置いてても同じと想わせたのか、父はそれから数日間を養生すると、私を連れて東京に帰りました。家の周辺はすべて焼野原、わずかに残された一画に幸い我が家もありましたが、軒下から廊下を貫いた焼夷弾が、床下に突立っていました。

母は、私を連れ帰った父をひどく怒りましたが、それから間もなく終戦を迎えました。玉音放送を聴きながら、ハラハラ涙を流す母の横で、神妙な顔をしながらも、もう父母や兄弟と別れずに済む喜びが胸につき上げ、踊り出した気持でした。

あれから数十年、両親、兄弟も、つつがなく歳をとり、私も二人の子が巣立つ日も、そう遠くない年頃になりました。比較して言えば、私の経験は、物の数ではありませんが、幼い日の肉親との別れは、それなりに生涯の記録に跡を残した重要な部分です。それも、国家より強制されたものであったことを、忘れられはしないのです。同時に戦争をふり返る時、戦争で多くのものを失いながら、家を守り、子を守り通して来た強い母達を想います。この母達は、ひたいに深い皺を刻みながら、今、再び、きな臭い世相をどう眺めて居るのでしょうか。彼女達が語り尽くしたものを、あるいは、語りながらぬものを、もっともつ

と掘り起し、引き継ぎ、子等に語り継いでいくこそ、今、私達に課せられた一番大切なことではないかと思うのです。

赤いトマト



新居 静子
(金剛支部)

夏、赤いトマトをみたら、あの子を想い出します。腸炎にかゝっていた「はじめ」は、トマトしか食べへなかったから……。

満州の奉天（日本人町）にいた私には、八月十一日から戦争でした。B29爆撃機の襲来が、八月九日にあつて、身の安全を求めて疎開する事になったんです。現地召集で七月七日に兵隊に行った主人は行方不明です。私も妊娠九カ月の身重、その上病気の子供を抱えては皆にも迷惑がかかります。『足手まといだから連れて行けない』と断わられたんです。でも誰もいてへんところに、子供と二人だけではおられません。もし途中で子供が生まれたら、顔をみせんと捨て、しもてかめへんから一緒に連れてって……とお願ひして、オムツとお産の道具だけ持って、一年九カ月の子を抱いて、着の着のまゝ瓦房



戦争は終わった！

店の小学校に仲間と疎開しました。

向うに着いた時に丁度、終戦の放送があつて、何か不気味やうなけど、ひとまず落付きました。終戦とわかったら満人は水も使わせてくれません。洗濯は小高い丘の川で行つてせんといかんです。炊事当番はあるし、私も身重の上には汗と垢であちこちおできが出来て、それに億と云う程のハエの大群に悩まされるから、食事もしらんようになります。子供と二人隅の方でただ生きることだけ考えてました。

十九日に奉天へ行く最後の列車が出るので、来た時と同じように皆にお願いしてやうと家に帰り着きました。それから子供は病気を治したいばかりに、ロシア人や満人

の暴行をくぐりぬけながら病院通いをしました。病院に働いている人が、どうしてそんな危い目までして子供を連れて来るんですか、私なんか新京を出る時に三人の子供を壁にぶつけて殺してきたのに……といはれるの。それを聞いて「そうやわ、こんな事してこの子も私も死んでしまふかわからへん、病氣も良うならへんし、こんなやつら畳の上で死なしてやりたい」と思て、九月二日頃に医者通いをやめたんです。

意識がもうろうとしていた子供の横にただじっと坐っているだけ。時々窓の方を指さす子に「しっかりしなさい、もうすぐお父ちゃんが帰ってくるからね」と言い聞かしてました。生み月に入っている私のお腹が時折痛みます。子供の眠ったのをみて外に出ますと、眠った子がどうして出て来たか、玄關の所でグタタリしています。慌てて私は子供を抱えて寝床に連れていき、「悪かった、悪かった、絶対そばに居るからね」というと安心して眠りはじめます。何も食べられないで骨と皮になった子供が、力を振りしほつて私の後を追いかけてきたのかとおもつたら、何でこんなむごいことしたんかと、いまでも泣けてきますね。

そうこうするうちに、九月七日に友達が軍医さんを連れて来てくれました。はじめてちゃんに注射してもらった少しもようなるんやないか、いうてやせ細った子に注射をしてくれました。夜に満人の暴動が起ると聞いて夜中まで起きてましたけど、疲れからかついウトウト、三、四時間眠つてしまつたんです。ハッと眼覚めると隣の子の様子がおか

しいの、足の裏をみるとブーツとふくれているでしょ。足の裏がはれるともうあかんときいてたんで、慌てて隣の奥さん呼びに行つたんです。それからあんなにお父ちゃんを恋しがった子が成仏するように友人の御主人に来てもらい、子供の手を握ってくれるように頼みました。けど子供は首を横に振つてにぎりませんでした。わかってたんですね。真暗い中でロウソクの灯を頼りに最後の水をやり、畳を上げて床板で棺桶を作ってもらい、枕経や線香をあげる間もなく遺体を山の上に運んでいかれました。身重の私は「一緒につれて行って!!」と泣き叫びましたけど、皆に押しとどめられました。けど私の心の隅にホッとしたものがあつたのは、事実です。ああこれで安心してお産ができると……人間て悲しいもんですね。

その十日あとに地獄の苦しみのお産を経験しました。はじめちゃんの身替りのような男の子が生まれ、お乳もないのに元気に育つて、病氣一つしませんでした。翌年の六月、生後九カ月の子供を抱えて引揚げた私の戦争は、主人が復員して来るまで続きました。主人を戦争のために送り出していなかったら、子供も助かっていたかわかりません。いろんなつらい事も半分ぐらい軽くなったかわかりません。

今では一年中、赤いトマトが見られます。けど、夏のトマトをみると、あの子を想い出します。

(聞き書き・鈴木 浩子)